

Gerard Manley Hopkins and His Poetics of Fancy

(要旨)

広島大学大学院文学研究科

博士課程後期英米文学語学専攻

学生番号： D135478

氏名： 田邊 久美子

本論文は G. M. ホプキンス (Gerard Manley Hopkins) の詩学における空想 (fancy) の概念に焦点を当て、その詩学、特に、メタファーに必要不可欠であることを、先行する文芸批評家の論や詩人の概念と照らし合わせ、また、ホプキンスに影響を与えた宗教的・芸術的・文化的背景をもとに考察することを目的とする。

本論文は Introduction, Conclusion の他に、中心となる以下の 3 つの章で構成されている。以下に、本論文の構成(目次)を記す。

Contents

List of Illustrations

List of Abbreviations

Introduction

Chapter 1: The Formation of Hopkins's Poetics of Fancy

1.1. Introduction

1.2. Coleridge's Definition of Fancy and Imagination

1.3. Ruskin's Definition of Fancy and Imagination

1.4. Hopkins's Introduction of Fancy into his Poetics

1.4.1. Hopkins's Definition of Fancy and Imagination in 'Poetic Diction'

1.4.2. Fancy as 'Diatonic Beauty': 'The Origin of Our Moral Ideas' and 'On the Origin of Beauty: A Platonic Dialogue'

1.4.3. Hopkins's Quest for the Origin of Words as Christ and Fancy

1.4.4. Toward 'the New Realism': 'The Probable Future of Metaphysics'

1.5. Conclusion

Chapter 2: 'The Language of Inspiration' and 'Parnassian': The Two Kinds of Poetic Diction

2.1. Hopkins's Definition of 'the Language of Inspiration' and 'Parnassian'

2.2. Hopkins's Obsession with Beauty and Fancy: The Influence of the Parnassian Movement

2.2.1. Introduction

- 2.2.2. Hopkins's Obsession with Beauty: 'The Leaden Echo and the Golden Echo' and 'To what serves Mortal Beauty'
- 2.2.3. 'The Flight of Fancy' as the Theme of the Parnassian School
- 2.2.4. 'The Flight of Fancy' in 'Il Mystico'
- 2.2.5. The Imagination of the Poet in 'A Vision of the Mermaids'
- 2.2.6. Hopkins's Departure from Wordsworth and Keats
- 2.3. The Power of Fancy in the Disguised Heroines of Shakespeare
 - 2.3.1. Hopkins's Interest in Shakespeare's Fancy
 - 2.3.2. *The Merchant of Venice*
 - 2.3.3. *As You Like It*
 - 2.3.4. *Twelfth Night*
 - 2.3.5. Conclusion
- 2.4. Between Truth and Untruth: Tennyson's Fancy in 'Lancelot and Elaine'
- 2.5. Hopkins's Experiments with 'The Language of Inspiration' Produced by Fancy
 - 2.5.1. 'Floris in Italy'
 - 2.5.2. 'The Beginning of the End'

Chapter 3: The Influence of Hopkins's Conversion to Catholicism on his Poetics of Fancy

- 3.1. Introduction
- 3.2. Hopkins's Conversion to Catholicism and his Belief in the Real Presence in the Eucharist
- 3.3. Fancy in the Gothic Revival
 - 3.3.1. Fancy in Gothic Architecture: Coleridge, Ruskin and Hopkins
 - 3.3.2. Hopkins's Sympathy for 'Oddness' in the Fancy of William Butterfield
- 3.4. Hopkins's Fancy as Revealing Inscape
 - 3.4.1. Fancy as Revealing Inscape in Nature
 - 3.4.2. Fancy as Revealing Inscape in Gothic Architecture
 - 3.4.3. Fancy as Inscape and the 'Haeccitas' of Duns Scotus
 - 3.4.4. Fancy as Revealing Inscape and 'the Affective Will'
 - 3.4.5. Fancy as Inscape and Metalanguage
- 3.5. Fancy in the Baroque: Hopkins's Entrance into the Society of Jesus and Baroque Elements in his Poetry

3.6. 'Fancy, Come Faster': The Abrupt Parallelism between Christ and Fancy in 'The Wreck of the Deutschland'

3.7. Fancy in Hopkins's Sonnets Composed between 1877 and 1882

3.7.1. 'The Sea and the Skylark'

3.7.2. 'The Windhover: To Christ our Lord'

3.7.3. 'Henry Purcell'

3.7.4. 'As kingfishers catch fire, dragonflies draw flame'

Conclusion

Bibliography

Chapter 1: The Foundation of Hopkins's Poetics of Fancy では、ホプキンズの空想と想像力の概念が先行の文学批評家、コールリッジとラスキンの影響を受けていることについて論じている。ヴィクトリア朝の詩人であり、イエズス会の司祭となったホプキンズは、詩における独創性を追及した詩人であり、詩語(Poetic Diction)の特異性に対するこだわりがその作品やエッセイに見られる。詩語について、ホプキンズは散文と詩の言葉を区別した S. T. コールリッジの見解に賛同し、その詩学に想像力説や有機体論の影響があることがわかる。しかし、ホプキンズはその影響にとどまらず、想像力(imagination)より空想(fancy)の要素を強調している。細部の多様性を強調する空想の要素はゴシック・リヴァイヴァルやラファエル前派などの芸術において、リアリズムの表現として現れるようになるが、ホプキンズも少なからずそのような時代の影響を受けていると考えられる。ホプキンズがコールリッジの想像力説を継承しながらも、空想の概念を発展させることによりその詩学に独創性を与えたことについて考察している。

Chapter 1 ではホプキンズの科学への関心についても論じている。ホプキンズが詩と科学を統合しようとしたことは彼の自然を詳細に写し取るスケッチに見て取れる。これは眼に見える現実の自然を詳細に写し取ることを重んじたヴィクトリア朝の文芸家に共通している。ヴィクトリア朝において、実証主義的科学の進歩は、それ以前のロマン主義の時代とは比べ物にならないほど急速に進んでいた。詩や芸術の世界においても、この急激な変化に対応する必要があるとホプキンズは感じていた。ヴィクトリア朝においては写真の発明によってリアリティが明白になり、目に映るものが真実であるという視覚重視の傾向が見られ、詩人の内面より、空想の要素としてのリアリティが尊重されるようになる。つまり、空想は目に見えるものを信じるリアリティの追及と関連する点で、科学の進歩という時代のパラダイムと呼応した美学ともいえる。個人的感情は主体を源とする意識的な想像力から生まれるが、空想は主体が客体を忠実に観察し自我を無にして客観と無意識に没入することにより生まれる。

ホプキンズは想像力と空想の概念を二種類のパラレリズム—「連続的パラレリズムとしての想像力」と「突飛なパラレリズムとしての空想」に分類している。「突飛なパラレリズム」はホプキンズのメタファーに顕著である。メタファーは全く関連がないと思われる事物同士を結びつけ、そこに共通する驚くべき本質を露にする。オックスフォード運動の影響を受け、英国国教会からローマ・カトリックに改宗しようとしていたホプキンズは、実証主義的科学が彼の信仰と詩学を脅かすものであると考えると同時に、取り入れるべき要素であるとも考えた。自然観察にとどまらず現象の背後にある本質を見つめ、すべてのものが統一原理により一定の距離を保ちながら結びつく世界—その驚くべき事物の間の空想の「突飛なパラレリズム」こそがホプキンズが「新しいリアリズム」と呼ぶ「超現実」なのである。

Chapter 2: 'The Language of Inspiration' and 'Parnassian': The Two Kinds of Poetic Diction では、ホプキンズの詩語の分類、'the language of inspiration'と 'Parnassian'が、空想と想像力の分類に対応していることについて論じている。前者がシェイクスピア、後者がテニスンやワーズワスに見られることをホプキンズは指摘しており、シェイクスピアの空想を理想としたことについて考察している。ミルトンはかつて *L'Allegro* において、シェイクスピアのことを 'Fancy's child' と呼び、コールリッジは覚書で、「無関係なイメージを結びつける Fancy がシェイクスピアの時代によく見られる」ことを指摘している。

ホプキンズはシェイクスピアの劇、*The Merchant of Venice, As You Like It, Twelfth Night* などに見られる、男装する両性具有的な女性たちに影響を受け、自らも 'Floris in Italy' という未完の劇において男装する女性を登場させている。男装の女性は fancy の装飾性・多様性・非合理性を表象し、中心と周縁を逆転させ、隠された真実を露わにする動作主となっている。空想は、ひらめき、愛、詩の修辞性、装飾性と関連している。比喩における修辞的要素や視覚的な愛と関連する fancy は、「変装」と「一目ぼれ」というパターンにより展開され、作品に複雑な構造と隠喩性を与える。この隠喩構造こそがホプキンズの目指した空想概念となる。

第二の詩語として the language of inspiration の下位にホプキンズが分類した Parnassian は、19世紀の美学思潮を表す用語で、ロマン主義の反動としての修辞の復活を擁護する運動との関連を示唆するが、「靈感のない修辞」であり、これについてホプキンズは批判している。しかし、Parnassian も一種の空想の要素であり、テニスンの *The Idylls of the King* 中の 'Lancelot and Elaine' に多用される 'fancy, fantasy' は主にヒロインのエレインと関連して用いられ、ホプキンズの空想概念に影響を与えたと思われる。テニスンの 'Lancelot and Elaine' (1859) では、現実と非現実の両方に関わる fancy の要素が作品全体に満ちており、エレインは fancy を具現化した人物として描写され、夜や月・狂気・無意識と関連する。fancy は「隠された意図」という意味合いで、この物語詩において重要性を持つ。fancy は装飾性により真の意味を隠す。fancy は真であると同時に偽でもあり、現実と非現実的要素が絶えず交錯する複雑な構造は、fancy の多義性を表わしているのである。

ホプキンはシェイクスピアの空想を理想とし、テニスンを批判しながらも、両者の影響を受けて、‘Floriss in Italy’と ‘The Beginning of the End’という、彼の詩学の成立の過渡期となる作品に着手した。これらの作品では、ホプキンのメタファーに彼の fancy の概念の実践が見られる。

Chapter 3: The Influence of Hopkins’s Conversion to Catholicism on his Poetics of Fancy では、ホプキンの空想が時代の影響を受けていたことについて論じている。ホプキンは両親の反対を押し切って、英国国教会からカトリックに改宗するが、これには 19 世紀にジョン・ヘンリー・ニューマンを中心として始まったオックスフォード運動やラスキンやラファエル前派による中世主義の影響が関与している。ホプキンが何より重視したのは、ローマ・カトリックの聖餐における実体変化である。聖餐において、キリストの体はパンであり、その血はワインであることが、眼前に提示されるが、これがホプキンのメタファーにおける空想の詩学と宗教観を一致させるものとなる。この章では、ホプキンの詩学と実体変化の関連、ゴシック・リヴァイヴァルの影響について論じ、最終的に、彼の空想概念が、その詩学の根幹として従来のホプキンズ研究で重視されてきた「インスケイプ」の概念と一致し、1877 年から 1882 年のソネット群において結実したことについて論じている。

本論文の特徴的かつ革新的な点は、ホプキンの空想が、その詩学の根幹をなしているということについて論じていることである。ホプキンの空想については、1970 年にホプキンズ研究者ロバート・ボイル教授が短い論文で論じているのみで、体系化して論じられることはこれまでなかった。従来のホプキンズ研究においては、その詩学の根幹となる「インスケイプ」の概念に焦点が当てられてきた。インスケイプ(inscape)とは「内部の」(in)「風景」(scape)、すなわち、詩人としての主体が客体としての事物に没入することでその本質を見るというホプキンの思想を表わしている。彼は事物の外観と内部にある本質の関係について思索し、それを比喻言語、特にメタファー概念に応用して、「上部思想」(overthought)と「下部思想」(underthought)という用語を考案している。つまり、言語には「表層の意味」と「深層の意味」があり、それが言語の二面性を形成するが、詩の言語は後者に依拠しなくてはならないという信念がホプキンの詩学に見られる。しかし、ホプキンのインスケイプの概念が、彼の空想概念と一致することについては、これまでに述べられたことはなかった。本論文は、従来のホプキンズ研究で見逃されていたホプキンの空想概念が、彼のインスケイプの概念と一致することを明らかにしている。ホプキンはシェイクスピアの劇における詩語や男装するヒロインに見られる fancy を理想として、the language of inspiration を追求したが、本論文では 1860 年代の詩語の実験から ‘The Wreck of the Deutschland’ における fancy とキリストの同一視を経て、1877 年から 1882 年のソネット群において結実した彼の空想概念の発展について論証している。